

横浜市立大学学術情報センター

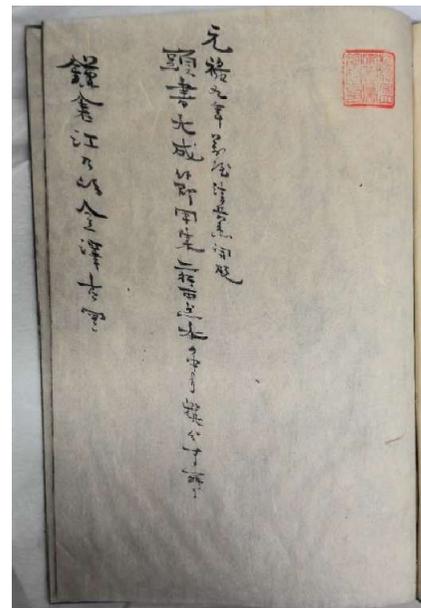
貴重書 月替わり展覧会リーフレット (156)

2024年9月の作品は
『鎌倉江乃島金澤古図』、『鎌倉物語』
—「金沢八景」と呼ばれる前の「金沢の八景」—

展示テーマ

～名付け親に出会う前の「金沢の八景」～

「金沢八景」。この名称は、金沢の地に存在する8つの景勝地を指すものである。中国の「瀟湘八景」に勝るとも劣らない素晴らしさを称えた呼び名で、中国の僧、心越しんごう禅師（1639～1696）が金沢を訪れた際に「まるで瀟湘八景のようだ」と言って名付けたとされている。ここまでの説明を読むと、「心越が金沢を訪れたことによって生まれた呼び方なのだ」と思われるだろう。私も実際にそう思っていた。しかし、今回取り上げた資料を読み解くと、心越が金沢に来るよりも前から、金沢の地に「八景」が存在したということが判明した。心越が金沢にやってきて「金沢八景」の名称を作った、という一つの出来事によって突然「金沢八景」が出来たのではないなら、どのようにして「金沢八景」が生まれたのか。「瀟湘八景」から現在の「金沢八景」につながる流れの中の「心越が金沢に来るまでの八景」に注目したい。



『鎌倉江乃島金澤古図』

(1冊)

江戸時代、元禄9（1696）年

作者：不明

版元：萬屋清兵衛

縦27cm × 横18cm

この作品は、元禄4（1691）年に書かれた、『かしら頭書大成節用集二行兩点』という書物から3頁抜粋されたもので、鎌倉の図、江ノ島の図、金沢の図が1頁（半丁）ずつ描かれている。鳥居や寺社、大仏だけでなく、山や川、海や道といった地形、さらに旅人や馬、松、

鳥などの生物まで描かれていて、人や動物の暮らしぶりを思わせる、生き生きとした名所の紹介になっている。

この作品の3頁目の「金沢の図」では、現在の「金沢八景」にあたと考えられる場所の紹介がされている。八景のそれぞれの場所に、「八けいの内」に続けて、「山市のせいらん」などの名前が書かれている。ただし、現在の「称名晚鐘」にあたる場所が見られない。絵の中の「正明寺」が現在の「称名寺」とみられ、当時の名称である

「遠寺晚鐘」がその辺りにあるはずなのだが、おそらく、染みになっている部分に書かれていたとみられるため、消えてしまったと考えられる。その他の7つはすべて描かれている。



『鎌倉物語』（1冊）

江戸時代、万治2（1659）年

作者：中川喜雲（生没年不詳）

版元：安田十兵衛

縦26cm × 横17cm

この作品は、鎌倉から金沢に至るまで、歌と文章で名所の観光案内をしたものである。『鎌倉江乃島金澤古図』の37年前、『頭書大成節用集二行两点』の32年前に書かれたものである。

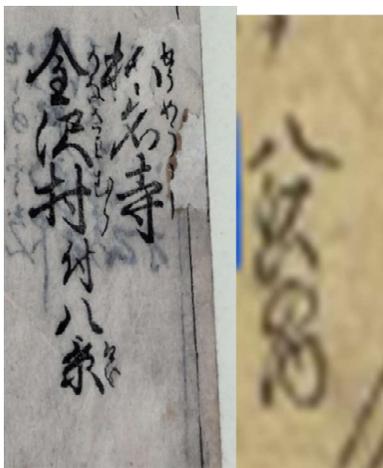
この作品の中でも、「金沢八景」に該当する名所が紹介されている。『鎌倉江乃島金澤古図』では見られなかった「称名晩鐘」にあたる「遠寺晩鐘」も書かれていて、現在の「金沢八景」と同じように8つの場所が紹介されていると考えられる。

展示のみどころ

～心越が名付ける前の「金沢の八景」～

「金沢八景」という地名が生まれたルーツは、「中国の僧、心越が金沢を訪れた際に、故郷の瀟湘八景を思い出して、金沢の景色を瀟湘八景に見立てた」とされている。瀟湘八景とは中国において古くから絵画などのモチーフになっている景勝地の名称である。ここからは、心越が金沢に来て瀟湘八景を思い出したことで「金沢八景」の名称が生まれたように読み取れる。しかし、心越が金沢に来たのは元禄7（1694）年で、『鎌倉物語』と『頭書大成節用集二行两点』が書かれた後のことである。さらに、『鎌倉物語』には「金沢村付八景」、『頭書大成節用集二行两点』には「金沢の図」に「八けい」の表記が見られ、この頃にはすでに「金沢村の八景」と人々に呼ばれていたと思われる。つまり、心越は、その「金沢村の八景」を「瀟湘八景」になぞらえて「金沢八景」と短い名称にした、と考えられる。

また、このときの「金沢八景」の名称と場所は、現在とは違うものであった。中国の瀟湘八景から現在の金沢八景までを図にすると次のようになる。『鎌倉物語』のころは、瀟湘八景の名称をそのまま引き継いでいたが、心越の「金沢八景」の名称を使うようになった頃から、現在と同じ名称が使われている。そのため、『杉田図會』における名称は上二字が金沢の地名、下二字が瀟湘八景の名称からの引用になっている。金沢村に広がっていた「金沢版瀟湘八景」とも呼べる「金沢の八景」が「金沢八景」として成立するために、金沢の地名を取り入れられたように感じる。



瀟湘八景	『鎌倉物語』	心越、『杉田図會』、現在
瀟湘夜雨	瀟湘夜雨	小泉夜雨
洞庭秋月	洞庭秋月	瀬戸秋月
漁村夕照	漁村夕照	野島夕照
江天暮雪	江天暮雪	内川暮雪
^{えんぽ} 遠浦帰帆	遠浦帰帆	^{おつとも} 乙艦帰帆
^{さんし} 山市晴嵐	山市晴嵐	洲崎晴嵐
平沙落雁	平沙落雁	平瀉落雁
煙(遠)寺晩鐘	遠寺晩鐘	称名晩鐘

この図からも、心越が金沢を訪れ「金沢八景」を名付けたころに「瀟湘八景」の名称そのものを使うことをやめ、金沢の地名を入れた「金沢八景」になったということが分かる。そして、地形が変わってしまった現在もこの呼び方が続いている。

参考文献

- ・古典籍総合データベース『頭書大成節用集：二行两点』早稲田大学図書館
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e0890/index.html
(2023年10月18日閲覧)
- ・『杉田図會』竹村立義，西荘文庫，1825年（※横浜市立大学所蔵）
- ・横浜金沢観光協会「金沢八景」一般社団法人横浜金沢観光協会
<https://yokohama-kanazawakanko.com/course/hakkei/hakkei001/> (2023年10月18日閲覧)
- ・『金澤八景いま昔』神奈川県立金沢文庫，2012年
- ・『新版かねざわの歴史事典』金沢区生涯学習”わ”の会，かねざわの歴史事典編集委員会，2010年，新版
- ・NPO法人横浜金澤シティガイド協会「広重の金沢八景」NPO法人横浜金澤シティガイド協会
https://yokokanaguide.org/wp-content/uploads/2013/02/11_hirosige.pdf
(2023年10月25日閲覧)

あとがき ～貴重資料に触れて～

今回この二点の資料を分析した結果、今まで知っていた「心越が金沢にやってきて名付けた」という事実についての見方が少し変わったため、複数の資料を分析する意義に気づくことができました。情報を比較する、という意識はこれからも心掛けていこうと思います。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、
展示品を除き申請が必要です。また、利用は
学術研究目的に限らせていただきます。
※過去の展示はオンラインでも公開中です！

令和6年9月2日発行
令和5年度 日本文化論A受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2
横浜市立大学 学術情報センター

第157回展示は令和6年10月上旬からを予定しています。